
歪の花

Noah

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪の花

【Zコード】

N4441A

【作者名】

Noah

【あらすじ】

綺麗でゴシックで神話的で少し怖くて…悲しい愛の物語。洋館に一人住む男性ユダと、記憶をなくして雨の森を彷徨う少女。咲き乱れる薔薇の花が、雨に映えて、怪しくて、綺麗。

前書き（前書き）

イビツノハナ

初めまして、Noahと申します。小説を書くのは大好きなんですが、あまり上手くないかと思われます。きっと読み苦しい部分や表現力の乏しい部分が多数あるかと思われますが……大目に見て頂けたら有り難いです。

では、前書きはこのくらいにして。

願わくは貴方が美しく妖艶な薔薇のとぼりに招かれんことを……

前書き

イビツノハナ

初めて、公の場に「」の文章を晒します。焦

きつと読み苦しい部分や表現力の乏しい部分があるかと思われますが……大目に見て頂けたら有り難いです。

では、前書きはこのくらいにして。

願わくは貴方が美しく妖艶な薔薇のとばりに招かれんことを…

1984年、冬。白い結晶が冷氣をまとい舞い落ちる中

彼は 何を 想つて??

この3か月近く、街をにぎわせていたのは新聞でも大きくとりあげられている一つの事件。

『連續異常殺人』

世間からはそんな風によばれていた。

被害者は若い男性や女性。首についた生々しい傷口からしたたりおちる血。

一度と開くことのない口から流れ落ちて…死体の周辺をまるで棺のようにならしめる。

真つ赤な 薔薇色。

その異常殺人の犯人は捕まらず、月日は過ぎ、半年もすると影を潜めるように…パタリと魔の手を止めた。

周りからすればただの事件かもしれない。

けれど

彼にすれば

それは

ただ一つの

愛への報いだったのかもしれない。

最後の

最後の……

『ついやああああつつ……』

……ただ覚えているのは、薔薇の中に倒れる、母。
『母さんっ！……お母さんっつ……』

冷たい体からは何の反応も返ってはこない。名を呼び、熱を失った手をちぎれんばかりに握り、それでも。

『お母さんっ……』

……薔薇？？違う……アレは……薔薇なんかじゃない。

母は、辺り一面を血にぬらし、手首を切つて死んでいた。生氣を失ったその顔からは涙が流れ。

ごめんね……と。

何年前の話になるだろ？。今でも瞼の裏にしつこじびりついて離れない。忘れられない。大切な人の『死』。

雨の中、傘も無く夜の森をさまよう少女。何時間森の中を歩いたのか。厚く白い服は水を吸つてかなり重くなっている。裸足の足は植物の鋭い枝で傷つき、赤く血が滲んでいる。

『……寒い……』

冬の雨。

今の彼女には金属のよう「冷たい。あてもなくそれまで続けることは、その障害は大きかった。

頭がぐらついてくる。足もともおぼつかない。ふらふらと一日の前には

闇

闇

闇

そして、闇の中に映える赤黒い薔薇。

『……薔薇？？』

何故？？

伸びた前髪がベールのように視界にかかる。顔をあげ、邪魔な前髪を払い、瞳をこらす。

彼女の瞳には真っ黒な闇の中にその姿を隠すようにたたずむ、漆黒の屋敷がうつっていた。

『つ…………』

ユダは暖炉の燃える暖かい部屋の中で、花瓶の薔薇を取り替えていたところだった。

金色の柔らかい髪の毛をすべて後ろに流し、つすいグレーの瞳と白い肌。黒い細身のスーツに身を宿し、胸元には赤いタイが締まっている。

『……トゲが……』

薔薇のとげが己の白い指先にささつている。……そつと抜くと、鮮明な赤い血が球体のように丸くふくらんでくる。暖炉の火が反射して艶やかに光るそれを見て、ユダは軽く身震いした。そつ……と、舌先で舐めとる。口内に広がる鉄の味。『…………』

花瓶に薔薇を挿し終え、窓の外に目を向ける。夜の黒と雨の騒音が奏でる旋律に、耳をすました。

やがて、ユダは大事そうに細く青い花瓶を抱え、窓辺へと歩いた。

『ト……』

出窓の桟に、花瓶を置ぐ。ちょうど、銀の燭台の真横へ。

『……』

窓に背を向けようとした時、彼のグレーの瞳にふいに人影がうつった。

『……誰……』

窓を開け、外の人と問う。

夜の黒に染まつたような薔薇をただ呆然と立ち尽くして見ていた少女は、長い前髪の下の黒い大きな瞳でユダをとらえた。

見たところ一六才くらいのその少女。力なく肩を落とし、胸まで伸

びたびしょ濡れの黒髪と体。傷ついた裸足の足。低めの身長の彼女はユダにつつすらとほほ笑み、

『こんばんは……』

とだけ言つてその瞳を閉じた。

あたりは
真つ暗で…

暖かい

『……う……』

少女は小さくうなつて重い頭を持ち上げた。

ズキッ

と、鋭い痛みが一瞬だけこめかみを貫いた。

辺りを見回す。古い洋式の部屋。壁にはたくさんの絵画、蠟燭、そして美しい白地に濃い灰色の薔薇柄の壁紙。一つだけ備えられた大きめの窓には、青いカーテンがかかっている。大理石のテーブルと、その上に置かれた白い花瓶。そして、それに挿してある、1りんの『薔薇』。

暖炉の前のソファで上半身を起こしながら、少女は思考回路の回復を計り、それとともに湧き上がる疑問を整理していた。

自分は何故、ここにいるのか？？

ここは一体どこなのか？

……私は一体……誰……？？

ただ記憶に残っているのは、『赤い薔薇』と……

その時、扉が重々しく開いた。

ギイ――――

あ……『この人』……

その扉の前には、静かに ユダ が立っていた。

……ツツアアツ……

少女は心中でそう叫んだ。 原因は、目の前に立つ男の瞳……。 吸い込まれてしまいそう。

バタンツ

扉を閉めて、黒いスーツのその男が歩み寄ってくる。 不思議と、目を離せずに……距離はつまり。 彼は少女の座るソファの前に立ち、少女の目線までかがみ、言った。

『僕はユダ。 貴方は?』

深く……でも澄んだその声は、白い肌と重なつてまるで深海のような色を帯びていた。

『わ、私はつ……』

……誰??

自分自身答えが出せず、ただ助けを求めるようにユダを見つめる。

『…………わからぬ……』

やつとそうつぶやけたのは、ユダが立ち上がり、テーブルの上の花瓶から薔薇を抜いた時だった。

『わからない……？』ユダは眉一つ動かさず、薔薇に向かって話すかのように問い合わせ返す。

『ここにいる理由も、自分が誰かも、何もわからないんです……』少女は、自分の寒々とした心を覆うように、自分自身の体を抱き締めた。肩の震えは、寒さからきているのではない。彼女の体を浸食しつつある、だんだんと目覚めはじめた恐怖。

スツ

目の前に、一本の美しい薔薇が差し出された。

薔薇を差し出している、ゴダに問う。

『貴方は僕の庭の薔薇を見ながら雨に濡れていたから……この薔薇を、どうぞ』

そつと、ユダの手から薔薇を受けて取る。その時触れた彼の手は

冷たかつた。

『……………サ…ん』少女が小さくつぶやいた。『?』コダの耳にも届

いたようだ

『……私のお母さんは……？？』
『……どこか遠い記憶。母』

母とおが遠い記憶

! . ! . ! . ! . ! . ! .

急に瞼に浮かんだのは、血で飾られた母の顔。

『あつ…………！…………！』

おえつとともにあの惨事の記憶が淵を切つたよつて流れ出で来る。

母の背後を染めた血。

涙。

ユダの手に似た…冷たい体。

もはや頭の中には母という大切な人の死の場面しか描けなくて。

苦しくて。

少女は自身の頭を割らんかのうとく抱え込み、涙を流しながらその
情景を一掃しようとした。

出来ない。

怖い。

暗い。

冷たい母の手が、私を……見てる……

……あれ……？

暖かい何かが、そつと……

おやおやの顔をあげると、伸びた前髪の間から、美しいコダの瞳が見えた。

『…………つ』

スーツの裾で、涙を拭ってくれた。

少女は何も考えられず、ただ恐怖から逃げるようにコダの細い肩を抱き締めた。

暗い波に飲み込まれないよう、岸にしがみついて子供の如く。

コダの冷たい手が、少女の体を優しく包んだ。

『…………プシケ…………。』

……プシケ？？

耳元で囁かれた深く美しい声を聞いたとたん、心から恐怖が消えた。

そして、コダに体を預けたまま少女は瞳を閉じ、深い夢の中へその身を投じていった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4441a/>

歪の花

2010年10月28日07時29分発行